

齊藤茂吉全集

第十四卷

齊藤茂吉全集

第十四卷

第三十一回配本（全三十六卷）

齋藤茂吉全集 第十四卷

定價 二千四百圓

昭和五十年七月十八日 發行

著 者 齋 藤 茂 吉

發行者 岩 波 雄 二 郎

〒101 東京都千代田區一ツ橋二丁目五番五號

發行所 株式會社 岩 波 書 店

電話 (03) 三三—四二二

印刷・精興社 製本・牧製本

落丁本・亂丁本はお取替いたします

歌
論
六

目次

短歌と古典	一
門川小惑	九
新年の和歌	一六
歌人の癡語	三
歌壇	二九
『やぶし』の傳統	三九
新萬葉集に就て	五
制作と研究	六
山部赤人の歌一首	八
白秋君の歌を評す	九
自歌自釋五首	七

新萬葉集選後感	101
柿本人麿の歌	105
新萬葉集	114
伊藤左千夫の歌	118
文學直路	123
防人の歌二首	131
櫻花の歌	133
良寛の歌	137
海犬養岡麿應詔歌	141
秋草道人の歌一首	147
短歌の問題	149
啄木の歌	151
戦場の短歌	154
梅の歌	171
戦地の歌	175

戰地吟詠……………	一八一
左千夫の歌……………	一八四
戦線からの歌……………	一八六
「萬葉集」について……………	一八八
羽衣駁撃……………	一九二
武島羽衣先生の歌評を駁撃す……………	一九三
武島羽衣先生の歌を評す……………	一九五
萬葉集精神……………	二六一
もののふの八十氏河……………	二六五
宇都野研全集上巻を讀みて……………	二七〇
日本百人一首論……………	二七三
事變短歌……………	二七六
支那事變歌集戰地篇……………	二九七
柿本人麿の戀歌……………	二九九
明日香路小感……………	三三七

警戒せよひとり天狗	三三一
歌と季	三三三
歌のこと二三	三四五
篤胤の歌論	三四五
和泉式部の歌	三四八
長塚節の歌	三五一
與謝野夫妻相互讃	三五四
萬葉の歌境	三六四
夢殿	四四一
萬葉集と自然美	四四三
萬葉集の戀歌	四五四
萬葉の歌の『健康的』特質に就いて	四六八
高千穂峰の歌抄	四九四
人麿短歌の聲調	五〇五
作歌の話	五一六

萬葉集一首	五二四
日本精神と萬葉集	五二六
切實の體	五三〇
感境體	五三八
歌集瀬の音	五四五
メモランダム	五四七
萬葉集の歌一首	五五五
萬葉歌人と海	五六五
山口茂吉君の新歌集「赤土」に就いて	五七三
支那事變の歌	五七五
俳人と萬葉集	五八五
白秋君の近作	五九三
萬葉女流十二ヶ月	六〇一
萬葉雜話	六一五
皮肉的	六四二

愛國歌小觀……………	六四七
ナバにをはる結句……………	六五八
伊藤左千夫……………	六六四
防人の歌の聲調……………	六七六
人麿の『小竹之葉者』一首……………	六八二
無題……………	六九一
愛で飽く……………	六九七
かむながらなる……………	七〇一
愛國百人一首に關聯して……………	七〇三
愛國百人一首評釋……………	七〇七
萬葉會に於ける談話……………	七二五
鷗外先生と和歌……………	七三二
無題……………	七三八
無題……………	七四〇
在米同胞の歌……………	七四一

古今集の古調	七四四
第三句の助詞『て』	七六九
感想	八〇〇
正岡子規の事二三	八〇二
作歌の範としての萬葉集	八一九
良寛の一首	八三三
短歌への入門	八三六
Nakiwarai	八五〇
明治和歌革新者	八五八
歌集形相	八六五
ゲダンケン・リリーク	八六九
農村と短歌	八七六
茂吉獨語抄	八九〇
弟子	八九〇
窪應和尙	八九三

歌について偶語	八九七
言葉につき	九〇〇
言葉のこと	九〇三
自歌抄	九〇七
不喚坊氏の語	九一〇
左千夫の語	九一四
ウインケルマン、其他	九一七
別離	九二一
涌井小観	九二六
寸言	九四〇
冬	九四一
春	九四七
夏	九五四
秋	九六〇
歌集歌書	九六六
歌人	九六八

「ともしび」より	九九三
言ひ掛け	九九七
短歌小言	九九八
童馬漫語	一〇〇三
アララギ九月號歌合評	一〇〇八
後記	一〇一

短歌と古典

○

短歌の眞の本質的發達は、萬葉集特に藤原朝から奈良朝にかけての歌であつたとすれば、その形式とそれに伴ふ特有の聲調とを會得するには、どうしてもそのあたりのものを學ぶのが順序ではなからうかといふことになる。つまり古典をばどう取扱つて好いか、特に作歌を勉強するとき、どう古典の歌、つまり萬葉あたりの歌を取扱ふべきかといふことになる。

例へば、萬葉卷二、十市皇女の薨じ給うたとき、高市皇子尊の悲しみ咏まれた御歌といふのが三首あつて、その第三番に、

山吹の立ちよそひたる山清水波みに行かめど道の知らなく

といふのがある。現在この歌の解釋は、橘守部の檜孀手に、『後世にいはゆる據字のよみかたにて、黄泉と書く字を、黄なる泉として、其黄色を山吹花の寫るに持せ、山清水を泉になして、酌とは只水の縁語のみ。黄泉迄尋ね行かまほしかれど、幽冥の事なれば、道のしられぬとのたまふなり』

とあるのに従つて、『山吹の立ちよそひたる山清水』は、支那では地中の泉を黄泉といふ、即ち幽冥界を差すから、それをば、『黄なる泉』と碎かずに、もつと碎いて、『山吹の立ちよそひたる山清水』としたといふやうに解釋せられて居る。

皇子が作歌せられた時の氣持、つまり技法上の意圖は實際はさうであつたかも知れず、守部の説は或はいいのかも知れない。併し、この一首をありの儘に目前に出されて、やはり挽歌として味ふ場合になると、『黄泉』の典據に據らずに、『山吹の立ちよそひたる山清水』は、やはり山吹の花の咲いて居る實景から、一つの象徴の世界を導き出すやうに解釋し且つ味ふ方が却つていいのではなからうか。そして挽歌の心持は、『汲みに行かめど道の知らなく』の中に籠めて、そして一首全體をば一の象徴詩として味ふといふことになる。

もう一度いふならば、この一首を讀んで私等の先づ受取るべきものは、山吹の花が咲いて水に映つてゐる山の清水を寫象として心中に再現せしめる。そして、その水を汲みに行きたいのだが、どう行けばその泉に行き著き得るか、その道を知らない。さういふ具合に受取る。そして、なほ念を入れて解釋上の吟味をするときに、はじめて、支那の熟語の、『黄泉』に思ひ及ぶやうになるのである。

守部の鑑賞の爲方はその反對である。先づ、『黄泉』といふことに思ひついて、それをくだいて、

『山吹の立ちよそひたる山清水』としたのだといふことにして、そして、理論上、挽歌だといふことにして附會するのである。この方が解釋としては正しいのかも知れないが、作歌上の鑑賞としては、第二義的であり間接的である。

私等は後代に生れて、遠い昔の細かい事實などはよく分からぬことが多い。併し、遺された作物に相對するときには直接その作物からある物を受取ることが出来る。この歌の場合ならば、山吹の花の咲いてゐる山清水として受取ることが出来る。決して『黄泉』などといふ熟語の概念ではない。また、直接、水を波みに行かうと思ふがその道が分らず悲しいといふことを受取つて、幽明境を異にするなどといふ理論ではない。よつて私等は先づこの態度を以て古典を鑑賞するやうに修練しようとおもふのである。そこではじめて古典に現代的な新しい意味が賦與せられ、何時まで経つても、古典は古典として置き去りになつてしまふことが無い。

吾はもや安見兒得たり皆人の得がてにすとふ安見兒得たり

これも萬葉卷二にあつて、『内大臣藤原卿采女安見兒を娶たる時作れる歌一首』といふ題があり、藤原鎌足が美しい采女を得たのを歡喜して作つたものであるから、この歌の文字の儘で解釋し鑑賞すればいいとおもふのである。

然るに橘守部の萬葉緊要には次の如くに云つてゐる。『此歌は、天皇を安見知し吾大君と申し